



『法然上人行状絵図』第三十五卷第二段(総本山知恩院蔵)

香林

こうりん

香林山 無量寺
 機関紙 第10号
 発行者 堤俊海
 香林編集委員会
 久留米市本町8-4
 TEL0942-32-3010
 FAX0942-32-2701

法然上人のおことば

御法語より

第七(諸佛證誠)

六方恒沙の諸佛、舌したまわず。これにをのべて、三千世界につけても、よくよくに、おおいで、もは御念仏候うてら、ただ弥陀の名号の付属、六方の諸佛を唱えて、往生すとの護念を、ふかく、こいうは、これ真実也と證誠したまうなり。うぶらせ、たまうべこれ又念佛は、弥陀の付属、六方の諸佛の本願なるがゆえに、の護念、一々にむなれを證誠したまうしからず。このゆえ余の行は、本願にあに、念仏の行は、諸行らざるがゆえに、六に、すぐれたるなり。方恒沙の諸佛、證誠

福岡教区浄土宗青年会特別事業

シンポジウム「心のいたみ」のいやし

＜高齢化社会への佛教的アプローチ＞

今や日本は、世界でも有数の長壽国であり、21世紀には、4人に1人が高齢者という超高齢化社会が来る事が予想されます。その中でも、主に障害を持つ高齢者の「心の痛みと苦しみ」は、容易に解決できる問題ではないと思われまます。

佛教は、自分が老いていく事を前提として「生老病死」を真正面から見つめ、人生で最も大切な事は、生きている時間的な長さではなく、その中味をどう生きるかである事を説いてきました。今回、この「シンポジウム」を通して、人間としての命の尊厳を問い直し、佛教者として、介護を必要とする高齢者の心の痛みをいかに癒し、又どのような実践が可能であるかを、現在高齢者の介護に関っている方々と共に考えて行く機会にしていけたらと願っています。

「シンポジウム」

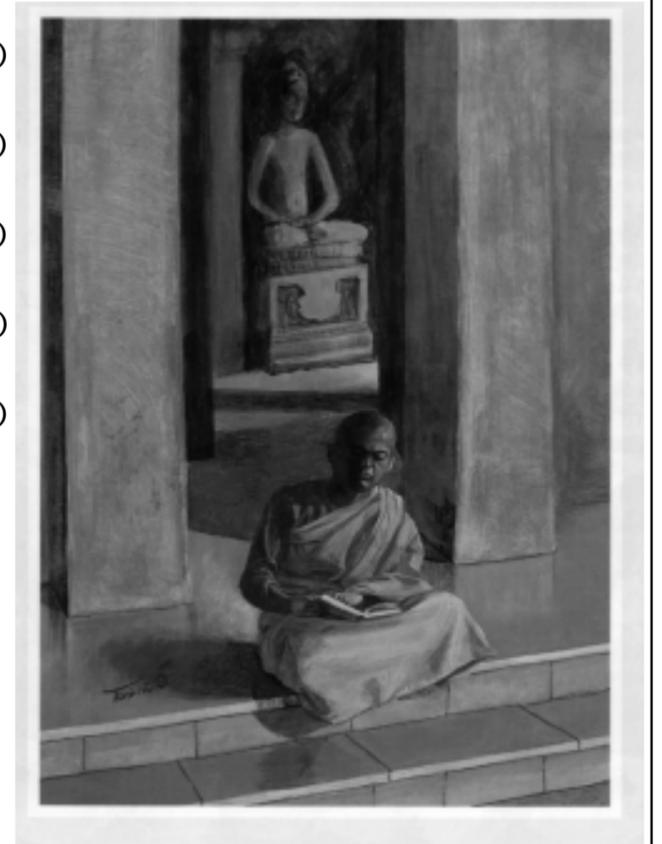
基調講演

奈倉 道隆(東海学園大学教授、医学博士、浄土宗僧侶)

「テーマ」(高齢者の心のいやしについて)

パネルディスカッション(パネリスト及びテーマ)

- 1、身体的苦痛、社会的苦痛について
吉田 隆幸(九州労災病院作業療法士)
 - 2、精神的苦痛について
下村恵美子(宅老所よりあい代表)
 - 3、靈的苦痛について
行正 純生(福岡市正光寺副住職)
 - 4、全人的苦痛について
奈倉 道隆(東海学園大学教授、医学博士)
 - 5、経験を中心に僧侶に期待するもの
納富 昌子(RKB毎日放送ニュースキャスター)
- コーディネーター
藤本 浄彦(佛教大学教授)



日時 平成9年12月13日(土曜日)
 午後1時開場 5時閉会
 場所 都久志会館 福岡市天神
 参加費 1,000円

主催 福岡教区浄土宗青年会
 共催 全国浄土宗青年会 九州ブロック浄土宗青年会
 事務局 北九州市小倉北区清水4-5-2 円応寺内
 電話 093-561-1951 FAX093-592-7310
 どなたでもご参加いただけます。

ともに会う ともに往き ともに生き



平成10年、浄土宗を開かれた法然上人が、浄土宗の根本宗典である「選本願念佛集(せんちゃんほんがんにんぶつしゅう)」を選述されて800年を迎えます。

お彼岸

お彼岸がやってきます。仏道実践週間ともいわれるこのお彼岸を好機に、お念仏生活へ一歩を歩みだしましょう。

お彼岸を迎えるにあたって

「暑さ寒さも彼岸まで」といいますが、お彼岸は春夏秋冬の四季にめぐまれた日本独特の仏教行事です。

私たちはこの仏教行事をとおして季節の移ろいをも感じとっています。お彼岸につきものの春の「ぼたもち(牡丹餅)」秋の「おはぎ(御萩)」などもその表れといえるでしょう。

しかし、この彼岸は季節を表す言葉ではありません。

仏事のQ&A

法然上人百四十五箇条問答より

Q

常に悪いことをせず、

善を行なおうと心がけて念仏を称えるのと、ただ阿弥陀仏の本願を信じて念仏するのと、どちらがよいのでしょうか。

A

悪を止めて善を行なうのは

全ての仏の戒めです。けれども、現実の私たちは、みな、それに背いている身ですから、ただひとえに、どんな人をも救おうと願う阿弥陀仏の本願を胸に深く信じて、南無阿弥陀仏と称えさせていただくのです。

智慧のある者も、ない者も、戒を守っている者も戒を守れない者も区別なく、阿弥陀仏は浄土に迎えてくれるのです。このことをしっかりと心得てください。

(第百四十五条)

かかわる

「デタッチメント」

恋愛下手な若者が増えているといえます。愛や性についての情報も情報も豊富異性の友人もたくさんいる。しかし、真剣に愛したことがない。恋人がいてもなにかの拍子にすぐ別れてしまう。結婚に対して身構えてしまつて、家庭を持つことができない。激しい愛情や、その裏腹の深い憎悪、こんな感情を避けて生きたい。周りの何かとは別の生き方をしたい。親とは別の生き方をしたい。放っておいて欲しい。

周囲の人や組織、社会そのものと深い関係を築くことが、どうもできなくて、すべてのものから距離を置いていたい。

ある小説家は、こんな時代の気分を「デタッチメント」(かかわりの無さ)と表現しました。日本の六、七、年代熱くコミット(かかわる)するのがこの時代の気分とするならば、こ

れ以降は個人主義の時代とでもいえるのでしょうか。しかし、人は、何かとかわりを持たないで生きることはできません。

愛に病む

九五年一月、大震災が阪神地区を襲いました。大火災、ビルや高速道路の倒壊悲惨な現場の映像が逐一、お茶の間に届けられました。世間とのかかわりを嫌っているかのように見えた若者たち、学生たちが続々と現場に駆けつけました。何かとかわりを持つていたい、参加することによって自分を発見したい。

マスコミはこれをボランティア元年と名付けました。

その年の三月、今度は富士の裾野の異様な建物群に無数の武装警官が突入しました。オウム真理教事件です。ひげ面でもしい顔の教祖が逮捕されました。社会や人生と無関係を装っていた者たちが、盲目的にかかわりを求め悪の教義にすかされて、暴走した事件です。どんなに個人的に閉じこもろうとも、人は

この世界、娑婆世界とかかわら

私たちは曰く、「あの世、この世」という言葉を使います。

「この世」はもちろん私たちの生きている現実世界であり「彼岸」です。

彼岸は煩惱渦巻く「四苦八苦」の世界です。限りある苦悩の世界をいとい離れて求められるのが「あの世」すなわち「彼岸」なのです。

彼岸は限りない命と智慧に満ちあふれた世界です。阿弥陀さまの浄土、西方極楽浄土こそが、私たちの願い求めゆくべき彼岸なのです。

彼岸という仏教行事をとおして私たちは、今を生きてこの私の命がご先祖から永々と伝えられて来た「命のバトン」を受けて生きていくという事実を再確認し、彼岸にいらっしやるご先祖をしのぶとともに、この私も命おえる時には彼岸での「俱会一処」を願い求め、「四苦八苦」の世界に埋没することなく精進してまいりますという心を堅固にすることが大切なのです。

ずにはいられません。ボランティアの若者たちもオウムの暴走した信者たちも、私たちが生きるこの時代の、同じ根っこを持つ正反対の典型的な例ではないでしょうか。

家庭が病んでいるといわれます。家庭内暴力、家庭内離婚、父親殺し、最も強い絆が必要な家庭の父も母も、夫も妻も子供たちも、それぞれが孤独な壁を積み上げ、愛が病んでいます。

時代の気分をデタッチメントと表現した小説家は、現代の日本人にとつて、おそらく夫婦が宗教を分ける入口になると表現しました。妻にとつて夫は、また逆も、ある一点で理解を越えた存在になりえます。お互いに強烈にかかわり合いを求め合い、激しい影響を相互に与えつつ、

やっと家庭が成立。現代人が家庭を成立させるための困難な条件、どこかこの時代の信仰に似ています。

縁つて起こる 「これがあるとき、かれがある。これが生ずるとき、かれが生ずる。これが無いとき、かれが無い。これが滅するとき、かれが滅する」(『阿含経』)

古いお経に残されたお釈迦さまの言葉です。ガンジス川のほとり、タライ平原の深い森の中、苦行と思索を経て、お釈迦さまはこう言われたそうです。仏教は人と人、ものとももの、人とももののかかわりを最も大切にします。世界は関係によつて成り立っていると説明します。

かかわる

「デタッチメント」

恋愛下手な若者が増えているといえます。愛や性についての情報も情報も豊富異性の友人もたくさんいる。しかし、真剣に愛したことがない。恋人がいてもなにかの拍子にすぐ別れてしまう。結婚に対して身構えてしまつて、家庭を持つことができない。激しい愛情や、その裏腹の深い憎悪、こんな感情を避けて生きたい。周りの何かとは別の生き方をしたい。親とは別の生き方をしたい。放っておいて欲しい。

周囲の人や組織、社会そのものと深い関係を築くことが、どうもできなくて、すべてのものから距離を置いていたい。

ある小説家は、こんな時代の気分を「デタッチメント」(かかわりの無さ)と表現しました。日本の六、七、年代熱くコミット(かかわる)するのがこの時代の気分とするならば、こ

ずる。これが無いとき、かれが無い。これが滅するとき、かれが滅する」(『阿含経』)

古いお経に残されたお釈迦さまの言葉です。ガンジス川のほとり、タライ平原の深い森の中、苦行と思索を経て、お釈迦さまはこう言われたそうです。仏教は人と人、ものとももの、人とももののかかわりを最も大切にします。世界は関係によつて成り立っていると説明します。

一つの絶対の神様が世界を作つて、その原因と結果で、この私たちの環境があるのではなく、私たちの周りのさまざま原因が縁つて起きたものだと言います。私たちの命も、宇宙もすべて、多くの原因がより合わさつて、そのかわりの中でできたといえます。

やさしい言葉でいい換えましょう。「おかげさま」ということは私たちが何気なく使います。「おかげさまで、会社もうまくやっています」「おかげさまで元気な子供に育ちました」。

のは、そう呼びかけられた人、たとえばあなたでなく、あなたを含めた多くのものや人なのです。原因と結果を一つ一つ分析するのではなく、より合わさつた糸のように考えるのです。 釈尊のメッセージ さらにお釈迦さまは、こうも言われます。「私たちがすべてがかわり合いの中に生きています。それを知ることが、最初の第一歩です。このより合わさつた糸をほぐすように、私たちの人生とその死が苦しみであることを知り、生きることの業の深さを悟り、感覚の欲望に振り回されないようにしなさい。そうすれば、一歩だけ人生の深さが見えてきますよ」と。

人と人とのかわりに病み、家族の愛に飢えた現代人、もつれ絡まつた縄のような世界から逃避する若い人に対して、「人と人、人とももの関わりを知って、世界と自分自身の命を知り、目覚めなさい」とお釈迦さまは諭されているのではないのでしょうか。